哲學研究　第三百四十七號

「善の研究」の生れるまで

——寸心先生傳資料の一節——

島谷俊三

一

先生は、明治三年四月十九日、石川縣河北郡宇ノ氣村字森に生れた。

【註一】先生は、戸籍上では明治元年八月十日生と云ふことになつてゐる。先生が、昭和三年滿六十歳の停年で大學を退かれたのは、勿論これによつたものである。この相違はどこから來てゐるかと云ふに、先生が少年時代金澤の師範學校に入學する際、年齢が少し足りなかつたので、二三年早生れに生年月日を訂正したのが、その儘になつてゐたものである。戸籍法とても今日の如く嚴密でなかつた明治初年のことではあるし、且つその頃、先生の父上は村役場に關係して居られたので、こんなことは容易に出來たのであらうと思はれる（先生の話）。

【註二】現在の宇ノ氣村は、森、狩鹿野、宇氣、七窪、宇野氣、内日角、大崎の七字を含めた總稱である。戸數約六百、人口三千五六百の農村と漁村とを兼ねたやうな村である（昭和十二年調）。

西田家の先祖のことについては、幸に系圖とか種々の記錄類が殘つて居り、且つ先生の祖父にあたられる方が、それらを整理要約したものが、先生の長男外彦氏のところに保存されてあるから、正確にして詳細なことは、それに依らなければ解らぬが、此處には簡單に、先生から承つたところだけを記して置く。

先生の話によれば、西田家の先祖といふのは、冬の陣だか夏の陣だか知らぬが、兎に角、大阪の役に出た武士であると云ふ。豐臣方か德川方かこれも分明でないが、主從で北陸に落延びて來て、この森に住みついたのであるといふからには、恐くは負けた豐臣方であらうと思は

れる。更にまた、そのどちらが主でどちらが從であつたかも今ははつきりせぬが、一人は西田家を創め、他は今も森にある長樂寺の住職となつたといふことである。

【註一】 この祖父については、先生が昭和十三年雜誌「改造」に書かれた「讀書」といふ一文の中に、「極く小さい頃、淋しくて恐いのだが、獨りで土藏の二階に上つて、昔祖父が讀んだといふ四箱か五箱ばかりの漢文の書物を見るのが好であつた」といふ一節がある。先生御自身も、この祖父は學者であつたらうと云はれて居た。

【註二】 長樂寺は西田家の菩提寺である。現在では眞宗の寺院であるが、初は眞言宗か何かの寺であつた。所謂寺の寶物ともいふべき相當立派な佛像書畫の類なども藏して居つたと云ふことであるが、何代目かの時に火災に遭ひ盡く燒失してしまつた。若い住職が遊蕩の費に窮し、それらを賣拂つたのが檀家に知れそうになつたので、その證據を湮滅するために放火したのであるといふ噂もあるが、眞僞の程は勿論わからない（先生の話）。

【註三】 先生の幼年時代までは、森のものは殆んど全部が西田家の小作人であつた。お屋敷の前には、本願寺の御堂にある柱にも劣らぬ位の大きな「もちの木」が御座いましたとは、當時を知る村の老媼の語るところである。それが或る事情のために、宇野氣の方に移ることになつたのである。先生が「或る教授の退職の辭」の中で、「私は北國の一寒村に生れた。子供の時は村の小學校に通うて父母の膝下で、砂原の松原の中を遊び暮した」と云はれて居る如き、先生の少年時代の思ひ出と結びついてゐる故郷とは、主としてこの宇野氣の方を指すのである。先生は故郷を愛された。先生が晩年夏冬を過され、特に御病氣以後は引續き住まはれ、遂にそこで亡くなられた鎌倉姥ケ谷のお住居を定められる際も、餘程鵠沼の方にしやうかと迷はれたとのことである。それは鵠沼あたりの、松林のある海岸の風景が、郷里宇野氣附近とよく似て居たからである。先生には昭和二十年六月亡くなられると、八月には郷里長樂寺の西田家代々の墓地に歸つて永久に眠られた。まことに「我死なば故郷の山に埋れて昔語りし友を夢みむ」といふ歌の通りである。しかし「洞然院明道寸心居士」と聞かされても、それが先生の御戒名であるといふことが、未だぴつたり胸に來ない。

二

父上、名は得登。天保五年に生れ、幼にして書を能くした。その書かれた森の村社の大幟は、當時名筆の評判高く、わざ〳〵近隣より見に來るものがあつたと云ふ。今も村の何處かに保存されてあるとのことである。六十一歳にして歿せられた。

母上は名をとさ女とよび、同村七窪、林家の出である。林家は代々十村（トハヅ）をして居つた村の舊家である。母上は眞宗の信仰極めて厚く、しかも子女の教育に對しては嚴格なところがあつた。天保十三年に生れ、七十七歳の高壽を以て金澤でなくなられた。

先生は、この兩親の間の長男として生れたのである。

【註一】戸籍謄本を見ると、先生は西田藤九郎養子となつてゐる。そのわけは先生の次の葉書が之を明にしてゐる。「西田藤九郎と云ふのは、西田家の別家だが早く絶家となつてゐたものである。父がある事情から私の幼時、私の名義上その別家を繼がすことにしたまでのことで、全く名目上のことに過ぎぬ。藤九郎といふ人はどんな人であつたか何も知らぬ。大部前に別家した人でもあらう」（上田やよひ氏宛）。

【註二】先生が郷里宇野氣の小學校の生徒に書き與へられた略歴の中にも、「幼時母ノ嚴格ナル家庭教育」とある。その一例として、母上は先生が未だ幼年の頃、毎朝數異抄の一句づゝを暗誦せしめられ、それができぬ時は朝食を與へられなかつたといふ話が殘つて居る。しかし、そのことを何時か先生に話したら、そんなことはなからうと苦笑しながら否定されて居た。

その反面に於て、母上はまた非常に情深い性質であつた。貧しい者や困つて居る者があれば、縱令、それが見知らぬ旅のものであつても、どこまでも面倒見てやられるといふ風であつた。これもやはりある年、村へ流れて來た一人の若い大工の如きは、その儘西田家に止り、屋敷の一隅に住まはせて貰つて、そこから近隣に働きに出て居つた。今永の爺といふのがそれで、先生が金澤に住んで居られる間は、始終手傳ひに出入して居つた（林一枝氏の話）。

【註三】先生の長女、上田彌生氏「あの頃の父」なる一文の左の一節は、肉親の孫の眼に映つた祖母の面影を傳へるものとして、先生の母上の爲人を知る一助にもなると思ふから此處に引用して置く。「思へば母と祖母が、父の生活に研究に何一つ邪魔にならぬ樣、專一に學究生活を續けさせて呉れたことは、全く驚嘆に

値する。その祖母は田舍の庄屋の娘に生れたゞけの別して學問のある人ではなかつたが、學者程天下の至寶はないと思つてゐる婦人であつた（中略）。考へる癖は父には母方の遺傳かも知れぬ。私の祖母はいろんな事を一人で考へてゐるのが樂みの樣な人だつた。女ながらも諸否など決して輕々しく云はない、男子に負けない膽力の据つた女だつたと云ふ事を叔母から聞いた。母も何時か男の樣な方だつたと云つた事がある。この祖母が大の父の贔屓で自分の息子を信ずること厚く、父程學問の出來る男は無い樣な事を私に聞かせてゐた。私の家が祖父の失敗から破産にならうとした際、祖父にねだつて五百圓の金を懷にし、幾多郎、憑次郎の二子を引き連れて上京し、一人を大學に、一人を士官學校に學ばせたのは祖母である」。

【註四】 母上は先生成業の日まで生きて居られた。先生の母上を念ふことはまた深きものがあつた。「母在世の日、毎年一兩度金澤に歸省す。母年老いて歩行に難し、而も余京に歸るの日門に倚りて立つ。余を見送ること久し」と題する「まさきくと門出送りし我母の老いたる姿今に忘れず」と云ふ如き歌がある。

三

先生は二人の姉上と、一妹一弟の五人姉弟である。長姉まさ女は安政生れで、八十餘歳の長壽を保たれて京都でなくなられた。

次姉のなか女は慶應二年に生れたが、明治十六年に若くして世を終られた。先生が竹馬の友、藤田東圃の「國文學史講話序文」の中で、「回顧すれば余の十四歳の頃であつた。余は幼時最も親しかつた余の姉を失つたことがある。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き所に到りて思ふ儘に泣いた」と語られてゐるのは、此の姉上のことである。

妹のすみ女は明治四年に生れ、同郡七塚村木津の高橋家に嫁いだ。先生の「形而上學的立場から見た東西古代の文化形態」を獨譯された高橋ふみ子女史は、その女である。

弟の憑次郎氏は明治六年に生れ、同縣出身の林洗十郎大將等と略々同じ頃に第四高等中學に學び、同じ樣に中途より陸軍士官學校に轉じて軍人となられた。先生が「國文學史講話序文」の中で、なか姉上のことに續いて、「近くは三十七年の夏、悲慘なる旅順の戰に、唯一人の弟は敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得ざりし有樣」

と云はれてゐる通り、日露戰爭で戰死し、金澤市郊外大乘寺山の墓地にその御墓がある。戰死當時未だ乳呑兒であつた遺女一人、今は立派に生長されて居る。

【註一】　なか女は、明治初年のしかも宇野氣の如き北陸の片田舍に於ける女性としては、珍しく學問を好み、早くより金澤に出て、その頃有名な漢學者や數學者の家塾に通つて勉强して居つた。先生自身も勿論年少の頃より向學の志はあつたが、それがこの姉上の影響によつて一層强められたことは云ふまでもない。小學校卒業後、再三金澤に遊學することを父上に願はれたが、長男のせいもあり容易に許されなかつた。僅かになか姉上の助言により、師範學校ならば、卒業後小學校の先生として村に戻ることが出來るからと云ふので、父上の許しを得た。「十三四歳の頃小姉に連れられて金澤に出て師範學校に入つた。村では小學校の先生程の學者はない。私は先生の學校に入つたのである」（或る教授の退職の辭）とは、その當時の回想である。師範學校はチフスに罹つて一年程休學した爲に止してしまつた。しかし後に石川縣專門學校から第四高等中學に學ばれる機緣を與へられたのは、正にこの姉上である（先生の話）。

四

明治五年の學制發布により、宇ノ氣村でも、先づ森の長樂寺本堂の一部を使用して學校を創立した。明治八年四月のことである。これは勿論學校と云ふも、ほんの名のみで、通學する學童も極く少數であつた。先生の家はこの頃既に森を去つて宇野氣の方に移つて居たが、そこから長樂寺まで通はれた。翌明治九年の秋には、宇ノ氣村の森七左衞門の家屋の一部を借りて宇野氣新小學校と稱した。家屋と云ふよりは、むしろ納屋と稱した方がふさはしい位のその二階が教室で、先生は其處で、四五十人ばかりの生徒と一所に、今日で云ふ複式教授を受けた。更に明治十二年には、先生の父上の御志により、森にある西田家の持家を借りて移り、新化小學校と稱した。この新化小學校の後身が、現在の石川縣河北郡宇野氣村國民學校である。

【註一】　先生が昭和十一年、父上歿後三十八年を記念して、鄕里の小學校に寄贈された藤樹全集五卷が今も殘つてゐるが、それには先生の筆で「吾家世々里正トナル。先人夙ニ教育ニ志アリ、明治ノ始率先シテ此校ヲ創立シ、村民ノ子弟ヲシテ勉メテ學ニ就カシム。名

ヅケテ新化小學校トイフ」と書かれてある。

【註二】 先生が小學時代、敎を受けた恩師の名は次の通りである。「先生の名は私もはつきり記憶して居りませぬが、はじめ山下清一といふ人であつたと思ひます。それから山下忠本（同姓なるが前人と無關係）黑田某（この人は短期間）梯田信行（名は確かならず）といふ如き人があつたと思ひます」（昭和十一年、宇ノ野氣小學校長宛の書信）。

先生の小學時代の遊び友達は、何れも先生より早く死んでしまつた。それで先生の少年時代のことに就いては詳しく聞くすべもない。たゞ先生は非常に負嫌ひで、嘘嘩などをした時は、いくら涙を流しても決して「負けた」と云はなかつたといふことである。その頃の友達の中で比較的遲くまで生きてゐたのは、森成次郎と田中某の兩人だけである。

【註一】 田中は若い頃「若ノ森」の名でならした田舍相撲であるが、晩年は郵便配達夫をして居つた。彼の死後、森の青年團が長樂寺の境內に彼のために建立した碑には「若ノ森　昭和五年　西田幾多郎書」と刻れてある。先生は森、田中など小學時代の友人のことを

案ぜられ、金澤在住時代は勿論のこと、京都へ行かれてからも、手紙の後には必ず兩人のことをたづねられて居つた（林一枝氏の話）。

【註二】 大學や專門學校の講演に招かれても、減多に出られたことのなかつた先生ではあるが、鄕里の小學校の兒童のためには、歸省の折などは賴まれゝば立つて話もされた。何時のことであつたかはつきりせぬが、何でもお盆の墓參に歸省された時のことである。森の幾多郎さんが歸つてゐるそうだが、聞けばこの頃偉い學者になつてゐるとか云ふことだから、ひとつ講演をして貰ふまいかと、村の衆がいやがる先生を無理に引張り出して、小學校の講堂に立たせた。お盆休みのことではあるし、夏の夜なものだから、涼みがてらの聽衆は堂に溢れるの盛況であつた。しかし先生の話が終る頃には、生欠伸をかみしめた青年團員が前の方に僅か殘つてゐるに過ぎなかつたと云ふ笑ひ話がある（林一枝氏の話）。

五

先生は、村の小學校を卒業すると一時金澤の師範學校に入つたが、病氣のため直ぐ退學した。その後は姉上と

一所に金澤に出て、漢學や數學を勉強するために私塾に通うた。先づ漢學は藤田維心といふ人に學んだが、之はほんの暫くのことであり、維心も亦あまり有名な學者ではなかつたらしい。次には先生自ら「余年十四受業井口孟篤先生。先生爲余講詩經及左氏傳且令余讀爾雅」と記して居られる通り、井口濟に就いて學んだ。井口濟は犀川或は孜々堂と號し、孟篤はその字である。文化九年金澤に生れ、明治十七年享年七十二歳を以て歿した、當時有數の漢學者である。

數學は上山小三郎の塾に通うて學ばれた。天文の木村榮博士なども當時同門であつた。元來金澤の土地は、關口開以來有名な數學者が輩出して、數學が盛んであつたが、上山小三郎も亦その高弟の一人である。その後明治十八年、同じ關口の門弟であつた北條時敬が、大學を卒業したばかりの學士で、石川縣專門學校教諭となつて、郷里金澤に來り、始めて新しい數學を教へ、先生も亦その講義の席に列した。先生と數學との關係は、後年に至るまで學問的にも深きものあることは、誰人もよく知るところであらう。

【註一】　犀川は「石川縣史」によれば、「息軒宕陰等ニ學ビソノ學ハ濂洛ヲ宗トスト雖モ而モ博覽廣渉一說ヲ規トセズソノ經ヲ解スルヤ訓詁精微ヲ究ム」と云はれてゐる程の學者である。江戸に居つたならば、彼等と肩を並べて天下の學者としてその名聲が聞えたであらうが、父母の孝養のためとて早く郷里に隱退したゝめ、世間的には餘り知られて居らない。その晩年は堅く門を閉ざして教を授くることも敢てしなかつたが、先生は特に犀川の孫に孟子を教へると云ふ約束で、詩經などの講義を受けられた。犀川はその教授の方法も當時の普通の漢學者とは異り、それは多分にエティモロギツシユなものを含んでゐた。後年、先生がそのことを狩野直喜博士に話したところ、それは當時では最も進步的な方法であるといはれたとのことである。それ程の學者でありながら、犀川には妙な好癖があり、屋敷の一隅に實驗場を建て、始終其處に入浸つては、禮記とかにある時計の製作に熱中して居つたと云ふことである（先生の話）。

【註二】　上山小三郎に關しては、先生の「木村榮君の思出」（昭和十九年「思想」）の中に、「木村君と友達になつたのは、私が上山小三郎といふ先生の所へ、數學を教はりに行つた時からのことである。上山先生といふのは、有名な關口開先生の弟子で、當時師範學校

の教師をして居られた。木村君もその先生の所へ數學を教はりに來たので、一緒になつたのである。木村君と私とは同庚で、御互に十四五歳の頃であつたと思ふ。その先生の教へに出られない前に、二階で、二人で幾何學例題といふ本の問題に、頭をひねつてゐたことなど、今に記憶して居る。その頃、私共の外にはあまり弟子もなかつた樣である」と云ふ一節がある。先生が京都に來られた頃は、上山先生は既に七十歳を過ぎてゐたが、歸鄉の際は先生は必ず此の昔の老先生を訪問された。

【註三】 先生自身が數學に對する勝れた才能を有し、且つ興味をもつて居られたことは、四高を卒業して大學に行く際「特に數學に入るか哲學に入るかは私には決し難い問題であつた」と告白されてゐる位である。先生の四高時代の數學の恩師田中鐵吉氏（この人も關口開の弟子）も、先生の數學の才を認められ、曾て筆者に「西田は數學には素人の樣なことを言つて居るが、なか〳〵どうしてそんなものではない」と語られたことがある。また鈴木大拙博士も最近の先生追悼文の中で「西田が數學に堪能であつたことは、若い頃から著しかつた。それから彼は北條時敬先生の宅に寄居して居たので、數學的頭腦は益〻發達したのであらう」と云はれてゐる。

上田彌生氏は「父は今でも數學に興味を持ち、孫達に向つては、なか〳〵自信があつて自慢である」と書いてゐるが、そのお孫さん達によく數學の問題を出し、答案が出ると、病中床に就いて居られた時でも、赤鉛筆で間違を直してやられた。京都の大學に居られた頃、夜遲くまで自ら微積分の問題を計算されて居つたことは有名な話である。

六

先生が石川縣專門學校に入學したのは、明治十九年七月、先生十七歳の時である。石川縣專門學校といふのは、舊加賀藩の藩校明倫堂の後身啓明學校が、明治十三年四月に改稱になつたものである。當時は本科と豫備科とに分れ、その後明治十七年七月、豫備科は附屬中學科と改められた。先生はその附屬初等中學科第二級に、中途より補缺で入學したのである。ところが明治二十年四月、全國に五つの高等中學校が設けられることになり、金澤にもその第四が置かれたので、專門學校は自然廢止となつた。それで在學中の生徒はそれ〴〵試驗の結果、適當

な學級に編入された。卽ち先生は、同年九月には第四高等中學校豫科第一級に、翌二十一年には同校第一部一年生となつた。しかし明治二十三年、表面は病氣退學の名義で、同級の山本良吉氏等と共に四高を去つた。それだから先生の名は、第四高等中學校本科卒業生の名簿の中には見當らない。

この四高時代の生活については、先生自身が「四高の思出」として既に書かれて居るから、此處に蛇足を加へる必要もあるまいと思ふ。たゞこの頃すでに後年の「善の研究」に於ける、純粹經驗とか直接經驗とかの思想の萌芽が育れつゝあつたことは忘れられないことゝ思ふ。また先生が、西田哲學の確立として記念すべきその著「働くものから見るものへ」をデディケートされて居る北條時敬先生との、この頃からの深き師弟愛は我々の心を打つものがある。

【註一】　その頃の師範學校が重に郡部の優等生を集めて居つたに對し、專門學校には主として金澤に住む舊士族の子弟の優秀なものが集つて居た。現在石川縣出身の名士として多少とも世間に知られてゐる人で、この專門學校に學ばぬものは殆どないと云つてよい。教師にもすぐれた學者が多く、その師弟關係に於ても、生徒間の交友關係に於ても、稀に見る理想的なものであつた。先生も「金澤は筆頭の大藩であつた所爲か、明治の始、他に先んじて西洋の學問が取り入れられ、比較的進んだ專門の學校が設けられた。專門學校と云ふのは、藩の學校から色々に變つて來た學校と思ふが、上級のものも下級のものも、教師も生徒も、皆友達の樣な本當に家族的な學校であつて、今に思出が多い。私共は最後の生徒と思ふが、私共より先輩の金澤出身者も、この學校又はその前身の學校を通らないものはない。これからの人々にハイマートといふ樣なものはだん〳〵になくなつて行くのであらう。併し私共の樣に、村で生れ田舍町に育つた老骨には、ハイマートと云ふものが、夢の樣に、いつまでも美しく懷かしく思はれるのである」と回想されてゐる（明治の始頃、岩波「圖書」）。

山本良吉氏「藤岡博士の思出」は、その頃の書生々活の一班を示してゐるから一節を引用してみる。「この新式貸本屋では、當時は、始めは石川縣專門學校、後には第四高等中學校の同級生であつた西田幾多郎君も、清水澄君なども可なり御世話になつたことゝ思ふ。教室に於ける同級生の席次は毎學期變るから、一々覺

はないが、君（藤岡博士）が一番、西田君が二番の事が何故か今でもはつきり頭に殘つて居る。明治十八九年の頃でもあつたらうか、當時金澤では衰微の極に陷つて居た節句を復興しようと、君と西田君と三人でその節毎にまはり持で節の物など食べる會を作り、そして君は當時金澤第一の新聞なる北國新聞へ節句復興の必要だの、節句の來歴など載せた。その前後に同趣味の數人が文會を作り、各自の文を一ケ月一回づゝ持ちより、一冊に綴ぢて廻覽批評した。その會員で今尚存命なのは上級生の松本文三郎博士、西田君、友田鎭三君位かと思ふが、會員數は少くもその倍はあつたと思ふ」（國語と國文學、第十七卷第四號所載）。

【註二】「始めて口語體の文章を書き出した頃」（岩波月報廿七號）と云ふ小文の中で先生が、「その頃今日の中學校といふ樣なものはなかつたが、それに相當する樣な學校では、作文といふ課目があつて、それでは大體漢文書き下し體の文章を書いたものである。併し漢文を書くものも少くなかつた。無論それは漢文と云つても、字を上下し假名がないと云ふだけのものであつたか知らないが」と云はれて居るから、その見本といふのも變な話であるが、參考までにひとつ揭げて見る。友人の遺稿のためにものしたものである。猶、鈴木大拙博士が「自分等の青年時代には勝手に雅號のやうなものをつけて、自分等の志すところを表示した。西田は自ら有翼と云つた。それはペガサスから出たものである」（「思想」二七〇號）と云つて居られることの實例にもなると思ふ。

小傳

吾徒數能文之士。必先屈指干淡齋川越子。而又溫厚謹直如君者所罕覯也。君名宗孝淡齋其號。川越君宗敬之第一子也。明治三年十二月生干加洲金澤三社。後遷居東馬場。爲人沈重寡言而資性頴悟。夙負大志幼而善屬文。八歲始就學干改良小學校。亡何遷而家居讀書習字又學數理。十八年自金澤中學遷干專門學校。及官置高等中學乃入焉。其在學也孜々矻々不敢怠懈。是以學藝日進識見月高。而最長干文章。其構思也刻苦烹練至無少疵而止。故其文整齊謹嚴一字不可移易。行文流暢字句秀麗。校中文會君常冠等輩。文稿累積年可囊計。至其雄篇傑作有一唱三歎之妙。又善讀英書屬英文。如理化學雖非其所長每試必居第一。師友推重遂爲特待生。卒業在近而君益謙讓一毫無矜色。而君嗜文之深漸厭他科。常恨其牽引干校則不能大專力其所長。於是斷然辭

特待尋欲退校。師友親戚固止之不聽。夫特待俗輩之所羨也。卒業凡庸之所榮也。諂諛糊塗以希特待過爾。優游以待卒業者比々皆是也。唯君抛區々之榮譽。獨立獨行闇然自修。將以大有所爲。眞非所謂毅然大丈夫乎。或以君爲孱弱之人。以其退校爲疾病之所致者謬矣。君退校以後閉室攻藝自晨至夜。唯誦四子之書二十餘時肘不離案。刻意勵行以古人自期明。友皆恐其醮病相勸出遊。不從如斯者二月餘。悒鬱成病癒學十餘日。以七月十三日屠腹二日而殞。年二十二。君自屠之前日懷尙書二卷來訪余。相共論文上下往復神色自若不異平日。不知其一且至此也。豈非已決死來暗告別乎。吁君何爲死也。或以身體羸弱勉學不自由乎。將以所期甚大而其才不稱乎。抑亦別有深意存乎。君爲人沈重其死必有故。是非君不可知也。唯至其從容自若視死如歸無所愧于古烈丈夫。亦可以見其爲人矣。吁嫉花不待夕明月不終宵悲夫。君嘗語余曰。方今我國言語淆雜文格破壞。有識之士不可不匡正焉。知君卽爲其人。而今也亡矣。吾亦深爲我國文學惜之。

明治二十四年七月　　有翼生　西田幾多郎記

【註三】「四高の學生時代といふものは私の生涯に於て最も愉快な時期であつた。青年の客氣に任せて豪放不羈、何の顧慮する所もなく振舞うた。その結果半途にして學校を退くやうになつた」と云ふ先生の御言葉を裏書するやうな一書簡が「廓堂片影」の中に見える。

拜啓頃者ハ勤學ノ模樣如何ニ御座候哉先學年ニハ貴君甚グ缺席多ク其爲不覺ノ落第被遊候段不得止次第ニ有之候其後飜然御悔悟御勵精ノ由傳承大慶之至ニ奉存候課業ヲ先ニシ自修ヲ後ニシ以テ內外ヲ全ウセンコト貴君ニ於テ難シト爲サズ自家ノ臆見ヲ準尺トシ敢テ學校ノ成規ニ乖ク固ヨリ其ノ義ニ非ズ順良寬溫法ニ循ヒ學ニ勤ム學生ノ德之ヨリ大ナルハ莫シ貴君宜シク猛省ス可シ兵式體據ハ運動ノ爲ナリ運動何ゾ必ズシモ兵式體操ニ依ラン以テ金石ノ海ニ泳浴ス可ク以テ卯辰山ニ登リ樂シム可シト謂フ是ヲ自家ノ臆見ヲ以テ準尺ト爲スト云フ近視ニシテ眼鏡ヲ掛ク以テ銃ヲ操ルニ不便ナリ身體孱弱ニシテ一時間ノ遽動ニ勝ヘズ而シテ近視ノ不便ハ斯クノ如クシテ免ル可シ孱弱ナル身體ハ斯クノ如クシテ遽動ニ習フ可シト已レノ不足ヲ責メテ跂及ノ方ヲ求ムノ順良寬溫以テ法ニ循フト云フ此クシテ餘暇アル乃チ海ニ樂ミ山ニ嘯ク余將ニ其風采高キヲ慕ハズンバアラズ此ノ如クニシテ餘力アル乃チ課目ノ輕重ヲ取捨シテ之ヲ自家ノ好惡ニ照ラシ而シテ精研自修ス

其造詣當ニ久シカラズシテ度ル可ラザルニ至ルベシ（中略）今日ハ日曜日ニテ朝半日ノ閑ヲ得偶然思ヒ出シテ此ノ書面ヲ寄ス去ル頃ハ胡桃ヲ澤山賜リ難有ク御納申候好物故折日煮テ味ヒ申候此段乍後レ御禮申述候

五月十八日　　北條時敬

西田幾多郎様

【註四】昭和四年の廣島高等師範學校々友會雜誌「尙志」第一〇九號附錄の中に、「北條先生に始めて敎を受けた頃」といふ先生の文章が載つてゐる。餘り知られて居らない樣であるが、「先生（北條時敬先生）が四高から一高へ移られる一年程前であつたかと思ふ。先生が私に自分の家に來いと云はれるので、私は先生の御宅に御厄介になつた。先生はいつも學校から夕頃歸つて來られる。夜には、座敷のテーブルを眞中に、左右に奥さんと私が机を並べて勉强する。遲くなると、先生が私にもう寢よと云はれる。私が自分の室に歸つて床に就いても、私の癖で時に眠れないことがある。すると十二時過頃から先生の室で琴の音が聞え始める。夜の更けるに從つて琴の音は益々冴えて來る。其中、私は寢てしまふ、遂にいつまで琴の音が續いたのか知らない」と云ふやうな先生一流の名文で書かれた面白いもので、且つ北條先生との關係もよく知られるものである。

【註五】昭和十一年雜誌「改造」所載の「鎌倉雜談」は、「善の研究」成立の過程を知る參考にもなると思ふ。

七

四高を中途退學した先生は、「當時思ふ樣、學問は必ずしも獨學にて成し遂げられないことはあるまい、寧ろ學校の羈絆を脫して自由に讀書するに如くはないと。終日家居して讀書した。然るに未だ一年をも經ない中に眼を疾んで醫師から讀書を禁ぜられる樣になつた。遂に又節を屈して東京に出て文科大學の選科に入つた」（或る敎授の退職の辭）。明治二十四年七月のことである。先生が選科に入らうと思つて東京に出た時は、「先生（北條時敬）から叱られた。たうとう方向を誤つてしまつた、選科などは學業の後れたものゝ入る所だ、今から大學の入學試驗を受けと云はれたのには困つた」（北條先生に始めて敎を受けた頃）。

その頃の大學の選科なるものが、如何樣のものであつたかは、幸に先生が「明治二十四五年頃の東京文科大學

選科」（昭和十七年、圖書）と云ふ一文を書かれて居るから、それに依るのが一番確かである。要するにそれは「當時の選科生と云ふものは誠に慘めなものであつた」の一言につきる。

猶、大學時代のことを知る資料としては、「井上先生喜壽記念文集」に收められてある「井上先生」、大正十二年「思想」に書かれた「ケーベル先生の追懷」などが參考になると思ふ。

【註一】　ケーベル博士は先生が三回生の時始めて文科大學に來た。ショペンハウエルの「パレルガ・ウント・パラリポメナ」を演習に用ひたと云ふことである（先生の話）。

【註二】　この頃の話として面白いのは、當時來朝したばかりの佛蘭西人エミール・エック師から佛蘭西語を敎はつた次第である。エック師は横濱に上陸してから僅か一週間目だとかいふことで、日本語は勿論のこと英語も話せず、佛蘭西語の一點張りであつた。オットーのグランマーを用ひて、その秋學期から直ちに講義を開始した。初めは外國語學校の先生が通譯に來てくれたが、その講義時間が朝の七時から八時までなので、だん〳〵寒くなつて來ると、その先生も都合が悪いとか何とか云つて來てくれなくなつた。そこでフランス語しか話せないエック師と、始めてフランス語を習ふ學生とが相對して授業が進められた。「私はその頃大學前に下宿してゐたので、朝の早いのには困らなかつたが、言葉がよく通じないためにエック師の起す癇癪には全く閉口してしまつた。それで最初は三十人ばかりもあつた學生も、年を越すと僅か七八人に減つてしまつて、エック師に對しては氣の毒であつた。しかしエック師は熱心に作文なども訂正してくれ、またフランス語ばかりで授業をうけたので却つて語學の力はついた樣に思ふ」と、何時か先生が話して下さつたことがある。

【註三】　先生の四高時代からの友人で、法科大學に在學中、「英才を抱いて夭折した福島淳吉」のために明治三十一年十月記した「靜齋遺稿の後に書す」（本文省略）なる一文には、先生は一松散人と云ふ雅號を用ひられて居る。

八

明治二十七年七月、無事大學を卒業した先生はひとまづ鄕里に歸られた。そして翌二十八年には尋常中學校

倫理科教員免許狀なるものを貰つて、石川尋常中學校教諭となつて、當時七尾町にあつた分校に赴任した。辭令には月俸四十五圓とある。ここに先生の所謂黑板を前にして坐した前半が終つて、黑板を後にして立つ後半が始る、黑板に向つての一回轉が行はれたのである。

明治二十八年五月、石川郡山島村平民、得田耕長女壽美女（通稱ことみ）と結婚された。先生の母上と夫人の母上とは同じ林家から出た姉妹で、從つていとこ同志の結婚と云ふことになる。（得田家の後は金澤に居住して居られる筈である）。

明治二十九年三月、先生は母校第四高等學校の講師となられたが、當時山口高等學校の校長をして居られた北條時敬先生の招きにより、翌三十年山口に赴かれた。獨逸語文法辭典で有名な片山正雄博士や、支那事變當時實業家として名をあげた鮎川義介氏などが、先生の山口時代の教へ子である。また故河上肇博士なども當時生徒として在學して居たが、先生は教へられなかつた樣である。

明治三十一年、北條時敬先生が迎へられて、山口より金澤の四高に歸られた。當時の四高は、「廓堂片影」の中にある北條先生の日記などを見ても、その一端が伺はれる樣に、二十五年騷動なるものゝ餘波を受けて、校風著しく弛緩して居つた。北條先生は之を肅正するために招かれたのである。その北條先生から、「此の難事業を遂行するためには是非とも貴君の御助力を必要とするから」と云はれては、先生もこの恩師の言葉を辭するわけにゆかず、明治三十二年再び母校に來られることになつた。肅正の仕事が略々終ると同時に、北條先生は、明治三十五年創立された廣島高等師範學校の初代校長として、そちらに行かれることになつたが、先生は引續き四高に止つて居られた。ここに「善の研究」の生れるまでの、先生の爾後十年に餘る金澤の生活が始つたのである。

四高に今も猶その名を殘してゐる「三三塾」なるものを先生が同僚三竹氏と共にはじめられたのは此の頃のことである。これは勿論創立の明治三十三年をとつたもので、東北大學の生理學教授藤田敏彥博士などが第一回の塾生である。更に明治三十四年には、舍監に任ぜられたがこれは一年足らずでやめられた。

【註一】始めて教壇に立つた先生は、能登の中學生を相手に、修身の講義からさては英語、日本歷史などまでも教へられた。學年末の休暇には新入生募集のため、草鞋がけで奥能登の村から村を歩き廻らねばならなかつた。しかしその頃、鳳至郡門前町には、燒けて鶴見

に移る前の壯大な總持寺の伽藍があつたのを見ることが出來たと云はれて居た。だがこの七尾時代については、他に何等語るべきことも殘つて居らない。たゞ暫く前に金澤第一中學校の倉庫から、「天爵と人爵」と云ふ當時の先生の修身の試驗問題が見出されたと云ふが、之が或は唯一の記念であるかも知れない。

【註二】明治二十九年金澤で生れた長女彌生さんは、長じて上田家に嫁いだ。先生の死に先立つて、昨二十年二月靜岡で急逝された。鈴木大拙博士も「特に此春長女の彌生さんが急に亡くなられた時は、隨分こたへたらしい。いつも口にも筆にもしなかつたやうな悲哀の念を洩して居た」と云はれて居るし、先生御自身も「彌生が突然死んで實に驚きました。彼は近來特に親切に孝行を盡した、私には何としても忘れ難いなつかしい娘であつたので、何とも云ひ樣のない淋しさと深い悲哀に沈んでゐます」と書かれてゐる(筆者宛葉書)。

三十一年には長男謙氏が生れたが、大學在學中不幸病魔のため冒され、大正九年享年僅か二十三歳で亡くなられた。また三十四年に生れた次男外彦氏は、一時石川郡内日角の、叔父にあたる西田憑次郎氏の養子となりその後を繼いだが、後に間もなく復籍された。

【註三】「時習寮の舍監時代の思出」

生徒主事の木場君の話によると、時習寮の古い書類の中に、大津康君が私に差出した室長の許可願などが殘つて居るさうだ。さういふ話を耳にすると、私にも當時の時習寮の面影が幻の樣に現はれて來、懷舊の情に堪へない。私が時習寮の舍監となつたのは明治三十五六年の頃でもあつたであらう。もう三十年近くも昔のことである。當時の北條校長から私と杉森此馬氏とに舍監をやれと云ふので、私にはそれは不適任な仕事であり、又私は事務的なことは一切好まなかつたのであるが、是非といふので已むを得ず引き受けた。その時、寮の事務の方には故佐野安麿君や今前田家に居らるゝ石川龍三君なども居られたが、何人かゞ交代で寮に泊らねばならなかつた。私も毎土曜日に午後から寮に行き、日曜の午後次の人と交代して歸つた。その時の時習寮といふのは四高の本館と同時に出來た舊ぼけた建物で、もう遠く以前に燒失したものである。私は土曜の正午から翌日曜の正午まで、同じ汚れた舍監室で事務机を前に固い椅子に坐つて居るのが實に苦しかつた。其間間斷なく書物を讀みつゞけた。どんな書物を

讀んだか今殆んど忘れたが、プライドラルの宗教哲學やマーク・ラツサフオードの自敍傳といふ樣なものはその中にあつたと思ふ。特に今尙思ひ出すマシユー・アルールドの、若い女が何か災難で突然死んだら下に死裝束をして居たといふ如き內容の詩である。當時は時習寮といつても舊い建物一棟で生徒もさう多くはなかつた。各室に室長といふものがあづた。今は誰々であつたか思ひ出し得ないが、一部で山岸哲夫君や二部で故河原繁君など居たことは記憶して居る。三部では故大津康なども居たのであらう。室長と云ふ人々は皆私と心を一にして能く務めてくれた。一同緊張した樂しい共同生活が送り得られたと思ふ。寮生と同食事も共にした。時には談話室に集つて話もした。自分の手當り次第に讀んだいろ〳〵の書物の內容も話した。當時出版せられた越後の英傑河合繼之助傳の話などした樣に記憶して居る。河合が大丈夫は常に地下幾尺の所に埋れて居る覺悟を有つて居なければならぬと云つてゐたと云ふ如きことが今も尙記憶に殘つてゐる。私が寮生一同と共にした時習寮の思出は今も懷しいものであるが、私の性質としてはとても舍監といふ樣な務をつゞけることはできなかつた。强いて一年で辭してしまつた。夏休業で生徒が盡く歸つた後、寮の跡始末をして、その日が最後の日と寮に別れを告げて歸つた。石川君が庭に咲いて居たタイサン木の大きな白い花を折つてくれた。暖い風が運動場のクロバの上を渡つて麗かな日であつた。今尙殘つて居るであらう、後方の二棟の建物は私と杉森氏とが舍監時代岡山邊まで出張して種々の寄宿舍を見て設計したものだ。（時習寮記念號雜誌へ寄稿）

【註四】 先生が始めて禪に參ぜられたのも此の四高教官時代のことである。「嘗て之を雪門和尙から聞く。大疑團を起し、公案を嚙んで嚙んで齒がなくなつた時之を徹見すると。又曰く、他の學問は所得を增加し行くが、禪は逆に何處までも棄て行くのであると。又曰く、禪は唯生死の境にのみ役立つと。」此處にある雪門和尙こそは、當時先生のついて鉗鎚を受けられた老師である。雪門和尙は、京都相國寺の獨園和尙の高弟で、越中國泰寺の住職であつたが、後金澤に來り、卯辰山の麓に草庵を結び、之を洗心庵と稱し此處に住んで居つた。學德共にすぐれた禪師であつたと云ふが、先生は[illegible]の雪門和尙について碧巖などの提唱を受けられたのである。因みに先生の「寸心」と云ふ雅號は、

「文章千古事、得失寸心知」といふ杜甫の詩から出たもので、雪門和尚から頂いたものであると云ふ（先生の話）。

九

先生は四高では主として獨逸語を、それから心理、倫理などを教へられた。その間わざ〳〵京都まで出掛けて禪に參ぜられたこともあつた。始めてベルグソンを讀まれたのもこの頃のことである。そしてかゝる間に、純粹經驗に基く先生の哲學思想は徐々に醸されつゝあつたのである。先生がその最初の講義に用ひられた原稿は、日本紙の罫紙に毛筆で書かれたものであつたが、後に生徒が謄寫にしたいからと云ふので、貸し與へられて、それは今は手元に殘つて居らない。若し現存して居るとすれば、その時の生徒であつた東京の河合良成氏か、京都の小笠原秀實氏の處にある筈だとのことである。それが「實在に就いて」なる題目の下に始めて世に現れたのは、明治四十年三月「哲學雜誌第二四一號」に於てゞある。そのことは「此論文は或る一部の學生に自己の考を話す爲の草稿として、自分が豫て考へて居た思想の大體を書きつけたものである。それも先頃遂に鬼籍に上つた病兒の介抱片手で書いたもので甚だ蕪雜不備なることは自分も知つて居る。固より公の雜誌などに出す積りではなかつたが、友人の勸めもあり、又自分も他日斯くの如き考を嚴密に組織して見たいと思ふにつけ、不完全ながらも大體の思想だけでも人々に見て貰うて教を受ける方が自分の益であると考へたから、遂に此の雜誌の餘白を汚すことにした」と云ふ前書によつても知られる。これは「善の研究」の序にもある通り、その第二篇に相當するものである。續いて翌四十一年八月の「哲學雜誌第二五八號」には、「純粹經驗と思惟、意志及び知的直觀」が發表された。これは「善の研究」第一篇にあたるものである。そして同じく第三篇に相當する部分も引續き生徒に講義された。

【註一】その頃四高の文科關係の教授の間で獨逸語の輪讀會が行はれてゐた。テキストとしてゲーテのものなどが用ひられたが、先生の讀解力の鋭いのには、專門の獨逸語の教師連も常に一目をおいて居たと云ふ（村木維夫氏の話）。

（註二）また此處に病兒云々とあるのは、明治三十五年十二月に生れ、四十年正月僅か六歳で亡くなられた次女幽さんのことである。「國文學史講話序文」を讀

んだ人には、それについて何も語る必要があるまいと思ふが、こんな話が殘つてゐる。「その頃小生の友人で京極といふのが之も塾の會の折、先生に、先生なぞは子供が死んだつて別に悲みなど無いでせう、と申したら先生は唯つた一言、馬鹿！と叱られたと云ふことを、京極が申して居りました。小生はその席に出ませぬ。間もなく北辰雜誌（校友會誌）に先生があの序文を出されたので、皆讀んで先生にもこんな心があるかと驚いたものです。それ程に私共は先生が解らなかつたのでもあり、又先生の心情に深いものがあつたので、兩々一層の距離があつた爲、驚きも大なものであつた。それまでは單なる長敬を持つて居たので、先生は私共には超越者であつたが、以來內在的に感ずる樣になつたと思ひます（下略）」（木場了本氏より筆者宛書信）。

その後は「哲學雜誌」に出た論文の拔刷などを生徒に與へては、これを少しづゝ讀ませて講義をしたり、また質問があれば答へてやられたりすると云ふ風な授業が行はれた。しかし先生も「敎官としても善良な敎師であつたといふ自信は有ち得ないのではあるが」と云はれてゐる如く、それはまことに退屈な仕事であつたに相違ない。敎壇の先生もひどく憂鬱に見受けられた。それには勿論「その終りの頃は病氣にかゝり身體が弱くて、當時の校長さんからよく小言を云はれた」と語つて居られる如く、多分に先生の當時の健康狀態が影響してゐたことであらうが、それよりもむしろ先生の如き人格を理解することの出來なかつた「當時の校長さん」の存在が、その原因ではなかつたであらうか。それは兎も角として、色々の事情もあつて、先生は遂に明治四十二年七月、學習院敎授に轉ぜられて金澤の地を去られた。しかしこの十年の間先生はまことに「來る朝も送る夕も一つの善の研究の爲に魂を打ち込んでゐた」（あの頃の父）のである。

一〇

明治四十二年十二月、先生は始めて大學の山上御殿で、「純粹經驗相互の關係及連絡について」といふ題の下に、當時の先生の思想の梗概を講演された。之は翌四十三年の「哲學雜誌第二七六號」に掲載されてゐる。

先生は東京では大久保あたりに住んで、そこから電車で學習院まで通はれた。學習院でも主として獨逸語などを敎へられた。當時の院長は乃木大將で、同僚としては鈴木大拙博士が英語を敎へて居られた。生徒には、西園

寺公の祕書をしてゐた原田熊雄男や、內大臣をしてゐた木戸侯、その他長與善郎氏、柳宗悅氏などがある。しかし學習院のやうなところで華族の子弟を敎育するといふことは、先生にはどうしても不適任であつた。たま〳〵、その頃京都の文科大學で倫理學講座に專任敎授がなく桑木博士が兼任して居られたので、先生はその助敎授として迎へられて京都に行くことになつた。明治四十四年のことである。

此の明治四十四年こそ「善の研究」が、先生最初の著作として、始めて世に出た記念すべき年である。實に先生四十二歲の時である。それはまことに高橋里美敎授の語られる如く「恐くは明治以後に邦人のものした最初のまた唯一の哲學書」であつたであらう。しかも此の「善の研究」の發行は、先生の四高時代の敎へ子で當時東京で出版業をしてゐたのを助けるために、故山本良吉氏の斡旋でなされたものである。最初は弘道館出版として菊版のもので、活字もそれに相應したものを用ひてあつた。これは今でも未だ所持してゐる人が相當あらうと思ふ。それが、今日我々の手にしてゐる如きものとなつたのは、その後版權が岩波書店に讓り渡されてからのことである。

【註一】また當時學生であつた天野貞祐博士は「私達が二回生の時、西田先生が招かれてわが文科大學の人となられた。嘗てその名を聞いたことがなく、初めて敎壇に見たこのひどく陰鬱に見える哲學者において人は直ちに尋常ならざる或るものを感じたであつたらう。けれども後年の西田哲學の創設を誰が當時想望したであらうか。いへつくりらの棄てたる石は隅の首石となれり、といふ言葉を私はしみ〳〵と考へさせられるのである」（京大文學部三十周年感想）と回想されてゐる。

後　書

これは今から既に十年ばかりも前に書きとめておいた未定稿に、慌てゝ二三手を入れたものに過ぎない。勿論雜誌などに發表すべき性質のものではないが、或は他日「寸心先生傳」でも書く人があつた場合、何等かの參考になることもあらうかと思つて、强いて勸められるまゝに載せて貰うことにした。多くの人の眼に觸れることによつて誤謬が訂正され、また未知の資料の見出される機緣ともなれば幸である。